

抄録： 研究成果報告書

テーマ：

リアリティセラピーのセキュリティ・マネジメント適用
に関する研究

研究期間： 2018年10月01日～2019年3月31日

東京通信大学
情報マネジメント学部
角尾幸保・教授

2019年3月31日

【2018 年度研究報告書・概要】

本報告は、人の行動や意思決定などのヒューマンファクタを考慮した組織内セキュリティ・マネジメントへの適用を調査・評価する目的をもって、2018 年 10 月より 2019 年 3 月まで実施した研究の報告書である。

本研究の本年度の計画は、

(1) 人の誘導を分析した内容を含む選択理論心理学の講義資料作成、および、

(2) 文献による当該心理学のマネジメントに対する有効性の調査、

を行うことである。具体的には、

(1) に関しては、選択理論心理学の概要説明、ソーシャルエンジニアリングの選択理論的解釈、人の認知機能を体感するワークの 3 点を含む講義資料の作成作業を行い、

(2) に関しては、書籍「リアリティセラピーの理論と実践」から、組織内マネジメントに使えるような記述を抜粋する作業を行った。

報告者 東京通信大学情報マネジメント学部教授 角尾幸保

報告日 2019 年 3 月 31 日

以上

【はじめに】

近年では、企業コンプライアンス順守が社会的にも注目を集めており、企業の存続にも影響を及ぼすといっても過言ではない。そして、情報を扱う企業においては、さまざまな情報セキュリティ・インシデントに、いかに対応するかが悩みの種となっている。これまでの多くの組織内セキュリティ・マネジメントでは、「罰則の3工程」とでもいうべき組織行動を繰り返し、あらたな罰則規定を作ることで被害の極小化を狙ってきた。しかし、残念ながらインシデントの再発は無くなってはいないようである。現在は、新たな効果的な手法を探す時期にあると考えられる。最初に効果的な手法を構築できた組織が、健全な組織運営における優位な一歩として他の組織に先んじることができようであろう。多くの模索が試みられる中、組織内セキュリティ・マネジメントに心理学的なアプローチを組み込む試みも、その流れの一つと考えられる。

組織内セキュリティ・マネジメントの心理学的なアプローチは、二つの方向性に大別できる。ひとつの方向性は、一人の人間を、平均的で均一な人間集団の代表としてとらえ、全体の傾向を何らかの事象の確率分布モデルとしてとらえる考え方である。すなわち、平均的な人間であれば確率的に一定の行動をするはずである、という「人間の行動は入出力関数として定義できる」という発想に基づくことになる。もうひとつの方向性は、一人の人間を、自律的な人間と仮定して、人間集団は自律的な人間の集合であるとしてとらえる考え方である。すなわち、人は一人一人が目的を持って行動をするはずである、という「人間は外界の情報を判断して内的動機付けで行動する」という発想に基づくことになる。

前者は、「何かが起これば、因果関係として、別の何かが起こる」という、刺激反応理論によるアプローチであると解釈できる。我々は、この点を変えようと思ひ、利用可能な心理学を探ることとした。近年の心理学的アプローチは、認知行動療法的なアプローチなど後者に属するものが多い。人は外からの情報を取り入れて、自ら行動するという考え方である。このような、心理学は複数存在するが、人が内的に動機づけられており、外側から情報を取り入れて、自らが内側に持つ願望を得るために行動を選択する、と明確にうたっている心理学が、選択理論心理学である。

選択理論心理学は、脳の機能を説明する理論であり、人種、性別、年齢、応用・適用領域を選ばない。事例の多い3領域では、セラピーへの応用をRT（リアリティセラピー）、マネジメントへの応用をLM（リード・マネジメント）、学校教育への応用をGQS（グラッサー・クオリティ・スクール）と呼んでいる。特にReality therapyに関しては、11の代表的な心理療法“Overview of Contemporary Counseling Models”の一つとして英米の大学院等で使われるテキストに記載されている。日本では、知名度が低い、それは逆に我々の特異性を主張するポイントになりえると考えた。

【研究活動の実施状況】

(1) 人の誘導を分析した内容を含む選択理論心理学の講義資料作成

日本では選択理論心理学の認知度が低いことを考慮し「選択理論心理学の要素の紹介を含みながら、その効果を体感してもらう講義の実施」を可能とする講義資料の作成を目指した。テーマは、「選択理論心理学に基づくセキュリティ対策」であった。講義の内容は、選択理論心理学の概要説明、ソーシャルエンジニアリングの選択理論的解釈、人の認知機能を体感するワークの3点を含む座学であり、リアリティセラピーの実技演習は含まれていない。作成した講義資料「ソーシャルエンジニアリング技法」は、本抄録では非公開とする。

(2) 文献による選択理論心理学のマネジメントに対する有効性の調査

代表的な選択理論心理学とリアリティセラピーに関連する書籍を概観・調査し、組織内マネジメントに使えるような記述が存在する書籍として「リアリティセラピーの理論と実践」を選択した。その書籍を調査し、「管理者が職場で使えるマネジメント手法」と「計画を立て、決意させる質問の目的や効果」について、抜粋・圧縮要約を行い報告した。

(3) 対面およびメール等による技術討議

本講義資料の作成に支援的な組織を選び、対面およびメールによる情報交換を随時行った。

【まとめと今後の課題】

本研究では、人の行動や意思決定などのヒューマンファクタを考慮した組織内セキュリティ・マネジメントへの適用を調査・評価することを目的とした活動を行った。

具体的には、

(1) 現状の組織内セキュリティ・マネジメントを罰則の3工程に基づいた運用がされていると分析し、よりよい改善方法を探すための心理学的手法の検討を行った。検討では、心理学的アプローチを二つの方向性に分類し、より良い方向性として選択理論心理学によるアプローチを選択した。また、

(2) 企業等における選択理論心理学の認知度を高めるために、人の誘導を分析した内容を含む選択理論心理学の講義として「ソーシャルエンジニアリング技法」の講義資料の作成を行った。また、

(3) 職場での即応用が可能な情報提供として、マネジメントに対して有効と考えられる書籍内容の要約抜粋を行った。

今後の課題としては、より実践的な技術習得を目的とした少人数でのトレーニング講座の開催や、改善効果の定量的な測定手法の検討などがあげられる。

以上

【抄録作成： 2019 年 8 月 2 3 日】